1

掃除の神様が教えてくれたこと

掃除の神様、チャックさんから学んだことは。

10-1　11-1

「ディズニーランド[*1]が日本上陸へ」

ある日、そう書かれてある小さな記事を見つけた。そしてそこには「キャスト[*2]募集」とも書かれてある。僕は、高鳴る鼓動を感じずにはいられなかった。

＊1　ディズニーランド

アメリカのアナハイムにあるディズニーのテーマパーク。東京ディズニーランドは、昭和五十八年（一九八三年）、千葉県浦安市にオープンしたアメリカ以外で初めてのディズニーのテーマパーク。

＊2　キャスト

映画や演劇などでの役割、配役。ディズニーランドでは従業員のこと。

（あの世界で働きたい―。）

アナハイム[*3]のディズニーランドに行った二年前から、もしかしたら心のどこかでそう思っていたのかもしれない。

＊3　アナハイム

アメリカ・カリフォルニア州の都市。ディズニーランドの本拠地。

その記事を見た翌月、勤めていた会社に辞表を出した。しかし、簡単に夢をかなえることはできず、その道は長く険しいものだった。四年の間に四回もの入社試験に落ち、食いつなぐためのアルバイトをしながら家族を養い、夢を追う生活は続いた。そして、五回目の入社試験でようやく面接までこぎつけ、僕は全身全霊でディズニーに対する思いを伝え、採用されたのである。世界がバラ色に見えるとは、こういうことだと実感した。

しかし、配属先の欄に目をやった瞬間、目の前が真っ暗になった。僕

10-2　11-2

の配属先は、よりによって「夜間の清掃部門」だったのだ。にぎやかな夢の国とは、最も無縁な真夜中の掃除である。家族になんて言えばいいんだ……。掃除だなんて、家族はおろか友達にも恥ずかしくて言えない。ましてや、勤めていた会社に辞表を出すとき、元同僚は、「夢を追うために退社するなんてバカバカしい。絶対に後悔するぞ。」と、言っていた。そんな彼らは、きっと笑うに違いない。体中の力が抜けた。しかし、開園はもう三か月後に迫っている。ここで迷っていたって仕方ない。一生清掃部門というわけじゃないだろうし、とにかく今の僕は与えられたことをやるしかないんだ。

11-3

10-3

四年の月日を経て夢をかなえた僕は、今日、これから始まる実地研修を受けるため、コスチュームを身にまとった。パークはまだ建設中のため、仮事務所にて実地研修が行われるという。

仮事務所に入ると、十代から三十代まで幅広い年齢層のキャストがそろっていた。アメリカのディズニーランドから来ている掃除の指導者を待っているところだという。

（掃除なんか、わざわざ指導を受けなくてもできるのに……。）

僕は、心の中でそう思った。

しかし、僕らに指導してくれる人は、掃除にこだわるウォルト・ディズニーの理想を、見事にかなえた偉大な人らしい。ウォルトの理想とは、常にパークがきれいでなければならず、「何回掃除したか」ではなく、常に一定の基準を維持しなければならないのだ。妥協が嫌いで完璧主義のウォルトは、真のプロフェッショナルを必要とした。そんなウォルトの眼鏡にかなったの

11-4